# Kyoritsu Brochure

共立パンフレット

number 005

Tokyo Christian University | Kyoritsu Christian Institute

## 福祉のこころ　人生、愛し、愛されて

東京基督教大学｜共立基督教研究所

Kyoritsu Brochure 共立パンフレット
number 005 Tokyo Christian University | Kyoritsu Christian Institute

contents

01 福祉のこころ――人生、愛し、愛されて　阿部志郎

10 レスポンス――その福祉思想を受けて　稲垣久和

本号は、2008 年 5 月 8 日、
東京基督教大学のキリスト教福祉学専攻開設に伴う記念講演会で
阿部志郎氏（横須賀基督教社会館会長、神奈川県立保健福祉大学名誉学長）により
行われた講演を一部修正して再録したものです。
後半には、当日行われた稲垣久和によるレスポンスに加筆・修正したものを掲載しました。

# 福祉のこころ――人生、愛し、愛されて

阿部志郎

戦後、フィリピンにまいりました。
現地の教会の本部に行きますと、明後日の日曜日に説教をしてくれないかと言われました。「喜んで」と答えると、さらに「その教会は少し遠いところにあり、教会のある村は戦時中日本軍に焼き払われて、たくさんの村民が兵隊に虐殺されたところです。いいですね？」と問われました。私もかつて軍隊に身を置いた者の一人として、内に戦慄のようなものが走りましたが、「参ります」と申しました。友人のジープに乗ってマニラから２時間半、そこはバターン半島のパンパンガという、日本軍が「死の行進」を強いたところにあるサンタ・カタリナという貧しい村でした。竹で編んだ教会堂で、窓はありますがガラスは入っていません。牧師に先導されて教会堂の後ろから入って行きますと、座っていらっしゃる方々が後ろを振り向いて私の顔を見ました。私は、睨まれているという思いがしました。講壇に立って「日本から来た阿部です」と英語で申しますと、若い牧師がパンパンガ語に通訳をしてくれます。そうしたら座っておられる会衆の方々がニコッと笑って微笑みを返してくださった。なぜかはわかりません。私は、戦争責任を詫びました。話し終えて、その牧師が私にこう申しました。「あなたは、この村に戦後来た最初の日本人で、この村に来た軍服を着ていない初めての日本人です。何か事が起こらなければいいがと内心心配しましたが、あなたの名前『アベ』は『友人』という意味です。今朝は日本からの『アベ』として歓迎します」。会衆が立ち上がって拍手をしてくれました。そして礼拝が終ると、竹で編んだ床の上に円陣を組んで手作りの料理をいただき、皆で和やかなひと時をもったのです。帰りの車で友人が「お前の名前が日本とフィリピンの橋渡しになるとは思わなかったな」と言いました。私は中学のときから名簿はいつも最初で、先生から最初に指されては「立って読め」と言われました。外国に行っても「ABE」ですからトップです。ロクなことがないのです。嫌な名前だなと思っていましたが、「今日は私の名前は世界で一番祝福された名前だと思いました」と友人に返しました。私にとって和解の経験でありました。
和解は、神が人を赦す、神の愛でございます。そして人と人、民族と民族、国家と国家、その和解は愛なくしては起こりえません。愛とは理解すること、信頼すること、喜びと悲しみを分かち合うこと、いたわり合うこと、そして赦し合うことです。この愛に支えられ、私たちは愛し、愛されながらお互いの生涯を過ごすことになります。

## 愛を受ける

1　「プロフェッショナル 仕事の流儀」第 58 回、2007 年 7 月 17 日放送／NHK。

最初は「愛される」という時期があります。
赤ちゃんが生まれ、お母さんが赤ちゃんを抱き、乳を含ませる。赤ちゃんはお母さんに抱かれると安らかです。それは体内にいたときの命の脈動がそのまま伝えられるからでありましょうか。母親とは子どもにとって特別の存在でございます。特別養護老人ホームで、ある一人の男性が毎朝窓から外に向かって「お母さーん」と叫ぶのです。きっと国へ帰れば、母親が戸口で両手を広げて迎えてくれるのだろうと思います。
NHK の番組「プロフェッショナル 仕事の流儀」に、帝国ホテルの総料理長が登場いたしました[1]。帝国ホテルには驚いたことにコックさんだけで 400 人おられるそうですが、そのトップでございます。「一番おいしい味はなんですか？」と訊かれると、フランス料理の専門家である総料理長は「おふくろの味です」と答えました。おふくろの味は腕や技でつくるのではないのです、心でつくるから美味しいのです。
ラテン語の「乳を含ませる・授乳（nutrio）」は、保育士・看護師（nurse）・栄養士（nutritionist）の語源となった言葉です。母親が赤ちゃんを抱くがごとく人々に仕える、それが福祉に携わる者の心でなければならないのでしょう。その赤ちゃんに、母親・父親・兄弟・祖父母が声をかけます。韓国では赤ちゃんに「カクング」と声をかけると決まっておりますが、私どもには決まった言葉がありませんので「いないいないばあ」などの言葉をかけるわけです。それは人と人の対話の始まりです。この対話の広がりのなかに子どもはすくすくと大きく成長してまいります。子どもは愛されて育つのです。
万延元（1860）年に、プロシアからオイレンブルグ伯爵の率いる使節団がやって来て江戸に入りました。江戸の町にはたくさんの玩具屋があって、オイレンブルグは並んでいる玩具がじつに独創的だという印象を受け、ヨーロッパの子どもよりも江戸の子どものほうがはるかに大事にされていると書き記しました。「銀（しろかね）も金（くがね）も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも」と山上憶良が詠ってから、「子宝」と言われるようになりました。しかし、歴史的に、日本の家族は子宝として愛された子どもたちを犠牲にしなければならないという、じつに辛い経験をしてまいりました。103 年前の明治 38 年、東北は大凶作でありました。宮城県では平年 150 万石だったのがその年は 14 万石の収穫しかない。すると口減らしをする以外に生き延びる方法がないのです。たくさんの子どもが捨てられました。そこで東北で 4 つの孤児院が建てられました。その 1 つが仙台キリスト教育児院で、今なお盛んに活動をされています。岡山の石井十次は、わざわざ東北まで来て 824 名の子どもを連れて帰り、補助金も助成金も措置（そち）費もない時代に、岡山で 1200 名の子どもたちを養育しました。その時施設で育てられた子どもは約 2000 名ですが、口減らしのために間引かれた子どもたちは 2 万名いたと推定されております。この犠牲になった子どもたちを家族や地域が悼んだのです。水子供養というのがそれでありますし、愛好者がいらっしゃるかもしれませんが、東北

のこけし人形とは子を消したことに対する供養だと言われております。
戦争が終って、貧しい時代がございました。「お互いさま」「お裾分け」と言いながらその貧しさに耐え、その９年後から日本経済は急に成長し始めました。経済が豊かになってきますと、価値観が変ってまいりました。若い女性の間で流行ったのは「家付きカー付き婆抜き」という言葉で、これは結婚相手の男性の条件のことです。家を持っていること、車を持っていること、姑（しゅうとめ）のいないこと。物を大事にして人を粗末にするということが起こってきました。経済を繁栄させるのに必要なことは生産力であって、生産性を重んじました。そして産業界は教育に要求を出しました。通常の勤務のみならず、残業・夜間勤務に耐えられる体力をもった子どもを送れ、また技術革新をしていくために知能の高い子どもを育てよ、と。教育はそれに応えて、全国の学校でアチーブメントテストを実施し、偏差値を設け子どもたちを輪切りにいたしました。ここからさまざまな新しい問題が派生していきます。いじめの報告は年間３万件を超え、今は学校の裏サイトが問題になっております。校内暴力の嵐が日本中に吹き荒れました。不登校は現在 12 万 7000 人です。政府がタイに送った児童調査団の報告によりますと、タイには不登校の子がおりません。その理由に、「進学競争がない」「のびのびと遊べる自然がある」「親がしっかり子どもを育てている」「地域が子どもを守っている」、そしてもう一つ「タイでは仏教が生きている」があげられました。2006 年度に家出をした子どもは２万名余り、そして殺傷、自殺という問題があり、児童虐待の相談件数は３万 7000 件ありました。愛されない子どもがいる。愛されるべき時に愛されない子どもたちをどうするのか？というのが私たちに対する厳しい問いかけです。
52 年前の 1956（昭和 31）年にマリアンヌちゃん事件というのが起こりました。スウェーデン人を父親に、アメリカ人を母親に持つマリアンヌちゃんという子どもがおりました。日本在住でしたが不幸にして両親を亡くしたマリアンヌちゃんは１人残されました。日本の制度によって養護施設に預かることになりますが、スウェーデンからマリアンヌを引き取りたいという申し出がありました。話がどこでどうこじれたのか、裁判になりました。参考人として出廷したスウェーデンの領事が「スウェーデンには１人の孤児に対して、養育を希望するボランティアが 100 名おります」と言い、これが決め手になりました。私は、１人の孤児に 100 人のボランティアがいる国とはどういう国だろうかと思いました。極端に言えば当時の私どもには、100 人の孤児に１人のボランティアがいるかいないかという時代でした。今は約４万人の子どもたちが親から離れて施設で生活をしています。里子として引き取られている子どもは 3400 名になりました。ようやく「社会的養護」という言葉が台頭してきて、社会で面倒を看ようという動きが起こってきてはおりますが、スウェーデンでは親に愛されない子どもがいれば市民が、社会が親に代わって愛しましょうということでした。それが市民社会ということでありましょう。私どもはそれを目標にしたいものだと思います。

## 愛を与える

神様はすべての人を祝福されました。それが聖書のいう「シャローム」です。しかし何らかの事情でその祝福から離れていく人がいる。その人が戻るところが教会でございましょうが、弱さをもつが故に祝福から絶たれた人びとを受け入れるのが福祉です。愛された子どもは愛する人になりますが、愛されなかった子どもが愛する人になるのは容易ではありません。アメリカの刑務所の調査によると、受刑者の８割はなんらかのかたちで子どもの時に虐待経験をもっている人びとです。愛された人が愛する人になる、これは人生の第二の時期です。

私どもはほんとうに人を愛することができるか。聖書に記されたサマリアの女の話には次のような出来事が記されています。イエス様が長い旅の途中、スカルの町に入ってヤコブの井戸で休んでおりますと、一人の女性が水を汲みに来ましたので「水を飲ませてください」と求めました。すると女性はなんと言ったか。「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」（ヨハネによる福音書４章９節）」。質問ではなく拒絶です。聖書には「ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである」と書いてあります。一杯の水を求める人に、一杯の水を差し出せば、そこに交わりができます。なのに、「あなたはユダヤ人ではないか」「あなたは北鮮（ホクセン）ではないか」「あなたはパレスチナではないか」と言って水を渡すことができない。それが世界の現実であり、私たちの偽りなき姿なのではないでしょうか。

人を愛することのできない私どもは、誰を愛するか。長崎の出島に初めてまいりましたのは四十数年前のことですが、入って行きますと案内板があり、日本文と英文とが 10m くらいの間隔をおいて並んでおりました。読み比べますと、日本文に書いていないが英文の案内には書いてある一行があることを発見いたしました。出島がつくられた理由は混血児の発生を防ぐためであったと。今は英文も取り払われております。血が汚れることを極度に嫌ったのです。それが今日の私たちの、難民に対する態度に反映されているのではないか。

明治時代に徴兵制が敷かれました。私は知りませんでしたが、私の一時代前の町の老人たちの何人かから「廃兵さん」という言葉を教えてもらいました。強い体をもって、軍隊に入って戦争に行って負傷する、それを私どもは傷痍（しょうい）軍人と呼びましたが、その前の時代は「廃兵」と呼んだのです。軍人でさえ戦闘能力を失うと棄てられました。私どもが愛する対象は“同じ人”“強い人”です。“違う人”“弱い人”は嫌いなのです。difference という英語は「違う」という意味ですが、私どもの「違う」という言葉は拒否を含んだ言葉です。違う人・弱さをもった人びとに対して、私どもの先輩たちはその人たちを愛するという行為を行ってきました。同じ明治時代にはロシアからアレクセイ皇太子が国賓として日本にまいりました。その時、東京では浮浪者狩りをし

まして、240名の浮浪者を狩り込んで強制的に隔離収容いたしました。これは今日もある東京都養育院の生い立ちであります。なぜ隔離したのか。お客様に東京の恥を見せるわけにはいかないからです。一方、同じ明治年間にまいりました救世軍のウィリアム・ブースは、その浮浪者たちを見て「この人たちを労わりなさい」と5万ポンドを置いて行きました。これが救世軍ブース記念病院（東京都杉並区）の始まりであって、今日まで続いているのです。ここに大きな人間観の違いがあります。

西南の役ではたくさんの兵隊が負傷し、救助がなされました。しかし救助されたのは官軍の兵隊のみで、賊軍の兵隊は置き去りにされました。これに憤って立ち上がったのが佐野常民（さのつねたみ）という人物で、負傷した兵隊に敵味方はない、すべて我ら同じ人類の一員ではないかと言って始めたのが「日本赤十字」であります。

英国のキャヴェル（Edith Louisa Cavell）という看護婦は、第一次世界大戦に従軍してヨーロッパ戦線の野戦病院で働きました。ドイツ軍が攻めて来て英国軍が退却するという時に、野戦病院だけが取り残され、そこにドイツ軍が入って来ました。キャベルは敵味方の境なく看護しましたが、それはドイツ軍から見ると異常な行動で、ドイツ軍はキャベルをスパイと断じて処刑をしました。処刑される前にキャベルは、愛国心だけでは充分ではありません、私は憎しみも恨みも持っておりません、という言葉を残しました。この処刑されたキャベルを、英国は、知名人だけを葬るウェストミンスター寺院に葬り、その言葉を記した銅像を観光の名所トラファルガー広場に置いたのです。今もキャベルの銅像が立っております。

賀川豊彦が神戸の新川のスラムに入り込んでから、来年で100周年になります。21歳のことでした。そこで「涙の二等分」という詩を書いております。スラムで虐げられている子どもと、涙さえ二等分しようという賀川の態度を表したものです。

今私は時計を持っておりますが、この時計は何百という細かな部品によってつくられております。その部品が組み合わされ、何の齟齬も来さず、正確に時計として時を刻むのです。これをcompatibilityという言葉で表しております。たくさんの部品が組み合わされて完成品をつくるのです。キリスト教で言う、枝（肢体）は多いけれども体は一つという、corpusの思想にもつながるのでしょう。体にたくさんの器官がある。しかし見えるところも見えないところも、手のようによく働くところもそうでないところも、すべてが力を合わせて人間の体をつくり生かしているのです。宋代の圜悟禅師の言葉に「生也全機現（しょうやぜんきげん）、死也全機現（しやぜんきげん）」というのがあります。ずべての器官が協力をすることによって人間の生を支えている。すべての機能が協働して人間の死を導くという思想です。一つの体を成している、このcorpusという思想から「連帯」という理念が生まれました。連帯とは一つの体のなかでの助け合いを呼ぶ言葉です。機械は齟齬を来さない。しかし私どもはそうはまいりません。組み合わせることができないのです。なぜなら、自己主張がありますから。自己愛をもっているからです。この自己中心の私どもがどうすれば人を愛し、人を教育していくことができるのかということは、私ども人間にとっ

ての大きな課題であるにちがいありません。
千葉に日蓮宗の修行をする堂がありまして、私の町の住職がつい先日、百日荒行というのを終えて帰って来て話を聞きました。百日の間、朝 5 時から夜の 11 時まで 7 回、冬の寒い中で水行(みずごり)をとる。その間はお経を読んでおります。食事は朝晩の 1 日 2 回、一椀の粥と味噌汁。お腹が空いてお腹が空いてどうにもならない。すると十日経ち二十日経ち、僧侶の間で「お前の方が飯粒が多い」と争いが起こるそうです。それが不思議なことに五十日、六十日と修行を積んでくると、風邪を引いた仲間に自分の持っている物を分かつということが始まる。半ばを過ぎないとこういうことは起こりません、ということを語ってくれました。それが修行なのでしょう。「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す」(ローマ人への手紙 5 章 3-4 節)という聖書の言葉がありますが、福祉の人材を育てる大学の生活というのもその修錬の時でございます。自己愛を、人との協力のため、人を愛するため、いかに他者への愛に高めていくことができるのか。
禅の大家であった鈴木大拙の講義を私はアメリカで聴きました。講義の後に学生が「原罪とは何ですか」と質問いたしました。鈴木大拙は即座に、質問した学生を指しまして「あなたがそこに存在することが原罪です」。学生は寂として声なし。人間存在そのものが罪である。この罪を自覚するということから始まらなければならないのだと思います。
三和銀行の頭取をされた川勝堅二さんという方がおられました。川勝さんがロンドン支店長をしておりましたとき、よく奥さんや家族を伴った財界人のパーティーがあったそうです。そこで奥さん同士が集まって話をしますと、話題がボランティア活動のことになる。川勝夫人はボランティア活動をしていないので恥ずかしいと言ってボランティアを始めます。「それは良いのですが、私は巻き込まれましてね」と川勝さんは言っておられました。ボランティアというのは自主的でございますので、してもしなくても良いのです。でも“しないことは恥ずかしい”と言わせる社会なのでしょう。日本の社会保障は戦後、英国の社会保障から多く学んできました。英国の社会保障をつくったのはベヴァリッジ(William Henry Beveridge)という人です。このベヴァリッジが、英国ではたくさんの人がボランティアに携わっているが、ボランティアをしていない人も少なくない。ボランティアをしていない人はしていないことに罪意識をもっている、と指摘しています。ひじょうに大事な言葉ではないかと思います。
私は人間国宝でもある上方落語の桂米朝がとても好きです。米朝は阪神淡路大震災のときに尼崎におりました。周りの家が被害を受けましたのですが、米朝の家だけは無傷でありました。私なら「助かった」「ラッキー」などと申しますが、米朝は「ご近所に申し訳ない」と詫びて回ったといいます。こういう感情を沖縄では「ちむくりさ(肝苦りさ)」という言葉で表しています。戦争でたくさんの人が死んで行った。自分は生き延びて申し訳ない。「肝が苦しむ」という言葉です。聖書にはたくさん「憐れみ」という言葉がありますが、旧約聖書のエレミヤ書に 1 箇所だけ、「我腸(わがはらわた)かれの爲(ため)に痛む」(エレ

ミヤ 31 章 20 節）という文語体の訳があります。人の苦しみを見て自分のはらわたが痛む、「肝苦りさ」であります。健康な人が健康であるが故に安全地帯におりますけれども、病む人に対してすまないと。恵まれた者が、条件に恵まれない人に対して申し訳ないという思いに導かれるならば、それは福祉の心でございましょう。恵まれた者の、恵まれない者に対するそれは、和解の業であるにちがいありません。

私の属しております教会で、私は毎週最前列に座りますが、隣に必ず若い女性が座りまして、私の親友でございます。たいへん心優しい女性でして、風邪を引いて咳をしますと後ろから背中を撫でてくれますが、礼拝中に私が足を組みますとピシャッと膝を叩かれます。天才的でございまして、会員の週報棚が 150 ありますが、私はいちいち名前を確かめて何分か掛かって配布するのを、この女性は 150 全部を知っておりまして、人が来るとサッと週報を抜いて渡すということをしておりました。音楽を聴くとベートーベンのソナチネ何番から北島三郎まで即座に曲名を言い、人の名前は会ったら忘れないという能力を持った女性でした。私の讃美歌を必ず隣で開けてくれます。ただ、100 番ならば 1 頁から頁を繰りつづけて 100 番を開きます。99 の次が 100 で、100 の次は 101 という数の概念がないのです。お察しのように、彼女は自閉症でございました。コミュニケーションは一方的。私は 8 年間その女性と行動を共にしておりました。その女性が交通事故に遭い、28 歳で亡くなりました。私の胸に隙間風が吹きました。異常行動に囚われておりましたが、その女性を失ったときに、その女性のもつ人格の重さを初めて知ったのです。この女性は 8 年間、約束を破ったことがありませんでした。私はよく約束を破りましたけれども。またこの女性は嘘を言ったこと、人の悪口を言ったことがありません。人間としてそれはできることなのか。人間としての麗しさの原点をもった女性です。その女性は私から見ればじつに強い人でありまして、私はその女性の前ではまことに弱く、貧しい存在です。

知的障碍者の仕事をした糸賀一雄という人がおりました。鳥取教会の出身です。糸賀は、知的障碍をもった子どもたちこそ世の光だと言っています。私どもはその子がかわいそうだから光を当てようという発想ですが、糸賀はその子らこそ世の光であり、世の光にしなければならないと主張いたしました。

ソニーを創業しました井深大という人がおります。井深さんのお嬢さんは障碍児でありました。井深さんは父親としてひじょうに重い負担を感じておられたのでしょう、「多恵子は私の生涯の十字架だ」と言いました。同時に「多恵子は私の生涯の光だ」とも言われました。障碍を持っているお嬢さんに、父親である井深さんは光を見たのです。その光に照らされたのです。そして児童福祉の仕事をされ、東京都の社会福祉協議会の会長もされました。弱さのなかから私どもが光を見出すことができるか、その光に照らされて行動できるか、ということが私どもの人生の宿題です。「強い者は、強くない者たちの弱さをになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない」（ローマ人への手紙 15 章 1 節）と聖書は記しております。弱さを担う、それが真実の人間の強さだと聖書は私どもに教えるのであります。

## 再び愛を受ける

愛した人は再び愛されるという第三期を迎えます。一昔前に「ポックリ信仰」というのが流行りました。特に関西・中国・四国・東京に多い。調査によると「ポックリ死にたい」というのが日本の年寄りの強い願望です。痛み苦しんで死にたくない。家族に迷惑を掛けたくない。「PPK（ピンピンコロリ）」という運動を政策にした県もあるそうですが、ポックリ死にたいという願望から皆さん「ポックリ寺」にお参りに行ったものです。ヨーロッパの年寄りたちはポックリ死にたくない。その理由は、自分が歩んで来た人生をゆっくり振り返りたい、友だちに別れを告げたい、家族に感謝したい、何より天国に行く準備をしたい。ここから始まるのがホスピスの思想です。ホスピスとは、死ぬところ、死を待つところではなく、最後まで人間らしく行き抜くことを援助する施設です。私が 50 年働いた施設に私を招いてくれたのはトムソンというメソジストの宣教師でした。この方が亡くなりまして、アメリカの教会で葬儀をいたしました。その葬儀のときに、同様に宣教師をしている一人息子が「今日は父親のセレブレーションです」と申しました。葬儀の席で、お祝いだと言ったのです。天国に凱旋する祝いという信仰告白でもあったと思います。私たちの人生観は、年を取ると下り坂を下って麓に死が待ち受けておりまして、奈落の底を覗きますから恐怖です。死をセレブレーションとする考え方は、そこに下り坂を想定しておりません。最後まで登って登って登りつめた死が、天国の入り口であるという信仰に立っているのかと思います。福祉は「保護」という言葉から変わってまいりました。「保護」は上から下へというニュアンスです。今は「自立支援」という言葉が使われております。「自立」とは身の回りのことを自分でするということだけではなく、最後まで人生の頂点を目指して登っていくこと。それが人生の完成であり、人生の上位を目指して歩き続けることが自立であり、それを支援するのです。では支援とは何か。ホスピスとはアメリカの病院では PCU と略語で書いてありまして、これでホスピスだとわかります。PCU とは Palliative Care Unit の略で、日本の役所はこれを訳して「緩和ケア病棟」としました。パリアティヴとは痛みを和らげて緩和するという意味ですが、この元の意味は、上着を脱ぐことです。コートを脱いで、痛み苦しんでいる病者にそのコートを掛ける、それによって寒さを防ぐことができます。ところがコートを脱いだ自分は寒くなります。寒くなるのを承知のうえで敢えてコートを掛ける、これが palliative、ホスピスであります。コートを掛けられた人とコートを脱いだ人が共に、それによって心を温められ豊かにされるからです。これが福祉の原理です。こういう福祉を、私たちはぜひつくっていきたいと願います。

1889 年にハワイのモロカイ島で、ダミアンという神父がハンセン病に感染し亡くなりました。ダミアンはハンセン病の人びとの中に入っていきましたが、神父ですから説教をします。最初は「あなたたちは」と説教をいたしました。ある日、焚火に手をかざしましたら、熱さを感じなかった。感染を意

識しまして、このときからダミアンは「私たちは」という呼びかけに変わりました。アイデンティティでございましょう。そのダミアンが死にますと、母国ベルギーは軍艦を差し向けて遺骨を引き取りました。その軍艦がベルギーの港に帰ってきたとき、波止場に１人の人が立っていました。国王です。国王が１人ダミアンの遺骨を迎えたのです。異郷の地で人知れず弱さをもつ人びとのために働き自分も感染して死んでいった人に対する、国を挙げての顕彰と感謝の思いを、国王を波止場に立たせることによって示したのです。私はそれが福祉の文化だと思います。
その文化を、これから福祉の人材養成を始める東京基督教大学はつくろうというのです。この大学がもたれている、大学をとおして社会を変えるという大きな夢に、教職員・学生・理事が共同体をつくって、実現のために歩き続けていただきたいと心から願わずにはおれません。

一人で見る夢は夢で終る。皆一緒に見る夢は決して夢では終らない。

レスポンス

# その福祉思想を受けて

稲垣久和

前項は、横須賀基督教社会館を拠点に、民間の立場で戦後の日本の社会福祉で開拓的な働きをされて来た阿部志郎氏による講演を収録したものである。阿部氏の講演は、余計な言葉を付け加える必要のない、聴いた者がその内容をそのまま心に刻んで帰路につくのが一番というすばらしい内容であったが、一方で、先生が長い実践の歩みのなかで培われた福祉の思想と哲学を受け継ぎつつ次の展開をしていくことは、今後、社会福祉とその人材育成に携わる者たちに託された使命であろうと思われる。そのような意味で、多くの著作・講演のある先生だが、ここに講演を再録させていただき、レスポンスとしていくつかの今後に向けた課題をあげることで、私共の大学のキリスト教社会福祉専攻の教育・研究の出発点とするだけでなく、広く社会福祉分野での今後の議論に委ねられればと考えている。

## 阿部福祉哲学の深みと先駆性

講演のなかで心に深く残った言葉の一つは、「愛し愛される」という阿部氏の「愛」の理解の深さである。フィリピンで起こったバターン死の行軍の現場を訪れた体験から、アジアに対する戦時中の日本の加害を記憶に刻みつつ「和解」と愛について語り、その愛とは、「理解すること、信頼すること、喜びと悲しみを分かち合うこと、いたわり合うこと、そして赦し合うこと」と表現された。愛については、さまざまに論じられてきているが、これほど端的に愛の本質について広さ高さ深さをもった表現を与えられたのは、筆者は初めてである。

広く知られているように、阿部氏の講演は、その人格に刻まれた深い教養に裏打ちされている。本学も基本理念に据えている「リベラル・アーツ（教養教育）」は、幅広い教養に則った人格形成を示す言葉だが、阿部氏の講演では、キリスト教の事例にとどまらず、禅の鈴木大拙、日蓮宗の荒行などの仏教の事例なども豊富に引用し、東西の宗教や文明の比較という点からみても含蓄のある内容を含んでいる。特に日本の幕末維新下の歴史を振り返りながら、一つひとつの出来事のなかに福祉というものの萌芽を読み取られていて、日本の福祉の歴史に対する理解を深められる。

また、ホスピスに言及されたなかで語られた、Palliative Care Unit の Palliative が上着を脱いで相手に掛けることだという説明には目が開かれる

思いがした。自分は寒くなっても、その熱を人に与えていく。互いに共有し合い、助け合い、支えあうところに福祉の原点があるのだという。連帯という言葉が聖書の体（corpus）——器官はたくさんあってさまざまな役割があるが体は１つである——という言葉から派生したのだという指摘もあったが、阿部氏の著書では「連帯」「自立」という言葉がたびたび登場する。「自立と連帯」は互いに相反するような概念であるが、人間はまず自立をしなければならない。そしてその後で、１人ではなく連帯していかなくてはならない、と。このように、片方ではなく両方向性をもっているところが阿部氏の福祉哲学の豊かさであろう。
阿部氏は『福祉の哲学』[2]という著書を出されているが、そのなかで、社会関係を人間（個人）・家族・コミュニティ・国家の４段階に分類しつつ次のように述べている[3]。

社会関係を、人間－家族－コミュニティ－国家と分類すれば、人間と地域社会を強調したヨーロッパに対して、日本は家族と国家を重視した。コミュニティとは、国家と家族の中間にあり、そこにおいて「公」と「私」が参加し、結びつき、新しい共同社会を形成する場を指す。

この言葉はたいへん含蓄に富んだ記述と思われ、今日「公共哲学」の議論が盛んになりつつあるが、阿部氏こそまさに公共哲学の先駆者であると感じる。この点をさらに敷衍して、以下に４つの点をあげたい。
［1］愛の原型となる母親の愛、福祉の心と語られているが、これを広く「ケア」という言葉で捉えたい。
［2］日本の福祉の歴史、特に戦後の「措置から契約へ」ということの意味について。
［3］助け合い、支え合いと「自立と連帯」の思想について。
［4］コミュニティ論および公と私の協働参加について。

## 日本社会に福祉文化を形成するために

### ［1］「ケア」とはなにか

私どもの大学でも、福祉の人材、特に介護福祉士（ケアワーカー）を養成していこうとしているが、そこで重要な福祉の心を「ケア」と規定し、福祉学をも含む専門家養成の学問を「ケア学」という言葉で呼んではどうかと考えている。
ケア学は相手をケアすることからスタートする学問である。福祉学という分野が学際的である以上にケア学は学際的になるが、その中心にあるのは、神に愛された人間の人格であり、そういう意味ではいくら横に広がり学問横断的になろうとも、人格に統一がある以上、統一がとれた学問として提示できるはずである。神が人間を愛（ケア）し、人間が神に奉仕（サービス）し、

2　阿部志郎『福祉の哲学（社会福祉専門職ライブラリー 基礎編）』誠信書房、1997 年

3　阿部『前掲書』87 頁。

人間が生態系をケアし（地の管理責任）、そして人間が人間をケアするのである。キリスト教の学問としての神学は主として神について論ずるが、ケア学は主として人間と人間社会の仕組みおよび自然環境問題について論ずる。社会的ケアの原型は親の赤子に対する愛である。このケアが社会化し、ケアワーカーという専門職が登場する背景はおよそ以下のようなものである。
生まれたばかりの赤子を母親はまず抱きかかえる。与えられた命をいつくしみ育む。そのことに理屈はない。やがて子どもの個性が出てくるので少々の距離をおく。しかしいつでも「私はここにいる」ということを言い聞かせて、親は子供を自立へと導く。これもケアである。過干渉は子供をダメにする。その反対に子供を無視する、幼児虐待、さらにはDV、総じて機能不全家族は現代の大きな問題だ。やがて家庭、社会で育まれ学校で教育を受けた子どもは、友人関係、教師との関係などに支えられながら自立し、職をもち、パートナーを見つけて次の世代を育む。親から受けた愛は次代の子どもに返していく。そこでケアは世代間の倫理となる、つまり非対称の面がある。
さて、次に高齢になった親のほうはどうするのか。かつての大家族制度では子どもが老いた親をケア（介護）していた。現代は産業構造の変化もあって、核家族になっただけではなく、家族が夫も妻も子も自立してそれぞれの人生を歩んでいるので、高齢者介護は家族内の仕事であると同時に社会化してくる。介護が社会化するところには、非対称よりも対称ないしは互酬性という面がある。自分の親をも含む親世代、祖父母世代の不特定多数に「お返し」をする。これを支える財源が保険というかたちになるか、税というかたちになるかは大いに議論すべきテーマである。介護の社会化は地域の役割が大きくならざるをえない。家族と行政との媒介をする多様なグループの主体的参加が必要だ。これを公共性と言い換えてもよいので、公共性を理解した専門職としての介護福祉士の養成が必要になる。以上のようなこと（つまり「公共福祉」という概念）は高齢者福祉だけでなく、今後、あらゆる福祉の基本的な発想となる必要があろう。税や保険を納めた見返りとしての公的援助という面だけでなく、親族、近隣、同信の友、親密なグループないしは私的グループによる支え合い（ケア）の心が基本になる。いわゆるボランティア精神、自発的に支えあう仕組みづくりが大切になる。
聖書に慣れ親しんだ人は、ルカによる福音書10章37節にある「善きサマリア人のたとえ」を思い起こしていただきたい。ここで「あなたも行って同じように（介抱）しなさい」というのは、主イエスの「ケア命令」と取ることができるだろう。伝道命令「出て行ってすべての国民を弟子としなさい」（マタイによる福音書28章19節）と並ぶ主イエスの「ケア命令」という意味である。キリスト教のミッションの概念を「伝道命令」と「ケア命令」の両方を含むものとして理解するのである。このような課題の神学的整理も、私たちが今後に取り組まなければならない分野である。

### ［2］戦後福祉の措置から契約へ

近代日本の草創期に、福祉の分野で開拓的な仕事をした人々のなかにはキリ

スト者が多かったことを、私たちは歴史を通して学んでいる。戦後は、福祉国家論が登場して、福祉は国家の仕事になった。いわゆる措置制度である。阿部志郎・土肥隆一・河幹夫の共著『新しい社会福祉と理念』4 は、戦後福祉とその変化の姿を、実践家、政治家、厚労省担当官というそれぞれの立場から生き生きと伝えている。同書で阿部氏は福祉の構造改革について次のように述べている 5。

私が今度の基礎構造改革で一番よかったと思っているのは形成概念です。今までの福祉は法律や制度によって与えられていた。しかも措置という実に手厚い保護を受けた。こういう仕事をしていますと、措置はありがたいものですよ。子どもであれ年寄りであれ役所が送ってくれる。待っていればいいのです。そして持参金つき。もっといいのは前払い。それに安住してきました。いつのまにか守りの姿勢になる。これは楽なのです。
今度の構造改革は、それを攻めの姿勢に転じさせるのです。これが福祉の本質だろうと思います。福祉は与えられて、受け身で仕事をするのではなく、一人ひとりがつくっていかなければならない。つくらない限り何もないのです。コミュニティというのはそういうものです。コミュニティはどこにもないのですよ。みんなの意思と努力でつくりあげない限りは。それが新しい文化を創造するという言葉でしてね。文化の創造という極めてダイナミックな意識と活動を伴わなければならない。

この言葉のなかには、今日の福祉の問題点が凝縮したかたちで詰まっている。受け身から攻めの姿勢への転換、形成の論理の必要性である。そしてコミュニティ論は市民社会論につながる。私たちはこのテーマを『Emergence 創発』誌で 2 度扱っており 6、2 度目の号では、キリスト教会が宗教法人として「攻めの姿勢」を見せつつある事例も取り上げた。「措置から契約へ」の新しい動きの一環である。ただこれが日本のキリスト教界の共通の関心事にはまだなっていないので、そのための「形成の論理」は今後に委ねられている。

**［3］「自立と連帯」と友愛**

阿部氏の福祉思想の中心に「自立と連帯」という考え方がある。今回の講演のテーマは「愛」であるが、筆者はこれに「友愛」という言葉を用いて、市民社会の形成には「友愛と連帯」が必要であることを主張してきた 7。「自立」のテーマは宗教心と深く関係している。かつての共同体（ムラ社会）に埋め込まれていた個人が、近代においてそこから抜け出すときにアイデンティティの問題が出て来る。エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』で有名になったテーマであり、哲学的には「故郷喪失」の現代人が抱く「自分とは何者なのか」という疑問である。近代人は個として析出されても、じつは多様化した社会のなかで、いろいろなグループに属して多層的・多元的なアイデンティティをもっているわけで、そこでのコミュニケーションが日々のその人の生きがいとなる。特にその多元的なアイデンティティの核になっている

4 阿部志郎・土肥隆一・河幹夫『新しい社会福祉と理念――社会福祉の基礎構造改革とは何か』中央法規出版、2001 年

5 阿部・土肥・河『前掲書』119 − 120 頁

6 『Emergence 創発』Vol.10 − No.3（特集「キリスト教公共福祉の可能性」）および Vol.11 − No.3（特集「キリスト教公共福祉の可能性 II」）

7 稲垣久和『国家・個人・宗教――近現代日本の精神』講談社現代新書、2007 年

のがその人の「人格」である。現代における宗教の役割は、この中枢の「人格」を支えて自立させるところにあるであろう。この中枢の「人格」を支えるものがないと、人格は統一を失ってバラバラになる危険性がある。
筆者はこの「自立」を「自我の再生（ルネッサンス）」という言葉で表現し、「異質な他者を受け容れられる自我」と表現した。ルカによる福音書 10 章に記された「善きサマリア人」のたとえを現代的に解釈して、隣人愛を「異質な他者を愛する友愛」と表現したい。「他者」とは、自分とは違う、自己の中に絶対に回収できないものをもった人々ということである。同じ仲間を愛するのは同胞愛であるが、そうではなく異質な他者を愛する友愛、そのような友愛を育む社会を形成していくことが必要とされている。そこには総じて、超越者の前に「自立」した人格が前提される。これは、今後の日本での大量の「異質な」外国人受け入れをも含んだ倫理的概念である。後期高齢者の医療費を誰が負担するのかといった問題も含めて、日本社会を閉鎖系で考えるのではなく、開放系で考える訓練を要求されているのである。少子高齢化の加速する日本社会が思想的に立ち向かうべき最大の問題がここにある。

### ［4］公私の協働と公共性―教会の役割

このときに重要なのは、ユミュニティにおける人格的な触れ合いである。あまり大きな組織になると触れ合いはむずかしくなり、公的福祉は基本的には地方政府の仕事になる。こうしたなかで、より当事者主権の福祉を実現していくためには、地方分権が徹底される必要がある。公と私の協働による福祉、すなわち「公共福祉」である。ここで、公と私の区別だけでなく、「私」から「公」へと媒介する概念が「公共」という言葉に込められている。大雑把に言えば公は政府、公共は市民社会であるが、筆者は公と公共とを厳密に区別する立場であり（これを公、私、公共の三元論と呼んでいる）、この区別がないと日本での市民社会形成は不可能とすら考えている。
公的援助の問題は法律的制約と関わるため、「友愛と連帯」というモラルと違う次元にあることも注意すべきである。人間の本質を「善」と見るかそれとも「悪」とみるか、人間関係の基本を「愛と協調」と見るか「敵対と恐怖」とみるか、「ケアの倫理」でいくか、「正義の倫理」でいくか。筆者は公共哲学の研究で、「国家主権論の脱構築」にこだわってきたが、それは、人間にはこの人間関係の後者の面、つまり悪、敵対、恐怖、破壊、闘争の側面があることを無視できないと考えるからである。しかし一方で、ルールづくり、すなわち法律の制定と執行で緩和してきたのが近代以降の人類の知恵だと受け止めており、この点から考えて、公的な制度による「正義の倫理」はどうしても必要となる。ある意味で「正義の倫理」は「ケアの倫理」と対照的なものであるが、神ならぬ人間にはどちらも必要とされている[8]。
ボランティアや NPO 活動が今後どのように日本の市民社会を成熟させていくか、これが福祉にとって鍵となるであろう。われわれは NPO 公共哲学をいま実践的に形成しつつあるが[9]、市民の生活領域の主権性すなわち、「市民主権」「生活者主権」「領域主権」[10]が、法・政治哲学的にも正当化され

8　稲垣久和「キリスト教公共福祉とはなにか」（『共立パンフレット』No.4、2008 年）を参照。

9　詳細は NPO 公共哲学研究会のホームページを参照（http://www2u.biglobe.ne.jp/~TRC/mm_vol44_9.htm および http://www2u.biglobe.ne.jp/~TRC/mm_vol47_9.htm）

10　稲垣前掲書（『共立パンフレット』No.4）参照。より詳細には『宗教と公共哲学』（東京大学出版会、2004 年）171 頁以下を参照。

ねばならない。これは今後に残された大きな理論的課題である。
最後に、キリスト教会が高齢者介護の分野に参入する現実的意味を付け加えておきたい。中央政府から地方政府に福祉事業が移行する傾向は、広い意味での「分権」の確立と連動している。生活者領域の主権（領域主権）にそれだけ近くなる。すでに福祉国家論（公的福祉）から「新たな公共」の担い手へと福祉が移りつつある。その担い手は地方自治体であると同時に営利・非営利のさまざまな主体であり、そこにキリスト教会も入っている。
今日、財政学者が地方政府を「生活の『場』における自発的協力の政府」と定義するときの「生活の『場』」「自発的」という言い方には、日本で強い「中央政府の出先機関としての地方政府」というイメージよりも、むしろヨーロッパで地域ごとに parish（教区）をつくっていた国民教会が念頭にある。たとえば「地方政府が主導して供給する現物給付とは、家族やコミュニティの自発的協力によって供給されてきた準私的財ということができる。つまり、ヨーロッパでいえば、共同体の自発的協力を組織化した教会などの慈善組織が供給してきた教育、医療、社会福祉という個々人あるいは家族に割り当て可能な準私的財なのである」[11] という表現にそれは明らかである。
もちろん、国民教会的な「教区」の歴史的経験をもたない日本のキリスト教会に、このイメージはまったく当てはまらない。ただ「生活の場」「自発的」という概念と「地方政府が公共サービスの提供者になる」、という考え方は今後の日本に生かすことができる。自由教会の伝統しかもたない日本の教会であっても、地域に受け入れられる努力が必要だからである。われわれが『Emergence 創発』Vol.11 － No.3 の特集「キリスト教公共福祉の可能性Ⅱ」で示した宗教法人としての教会の地域福祉への参入の事例は、そのようなモデルでもあった。これを持続可能なシステムとして形成していくためには、さらに一歩進めて、もう一つ新たなモデルを考えねばならないであろう。
先に述べた「ケア命令」を含むかたちで、今後にミッション概念を拡大していく神学的営為が教会に必要である。そしてそのうえで財政学者・神野直彦が主張する中央政府、地方政府に次ぐところの「社会保障基金政府」は、このミッションの基金機構をつくり上げるうえで大いに参考になる[12]。「社会保障基金政府」はもともと社会保険などを生み出す互助組織、たとえば労働組合、友愛組合など同業者による救済活動がモデルになって、「生産の『場』における自発的協力の政府」と定義されるが、これは、自由教会の集合としての日本のキリスト教会にも当てはまるからである。つまり、何らかのかたちの「社会保障基金機構」を日本の教会はミッション概念と同時につくっていけると思うからである。
もし「政府」であるならば、その財源は税金であろう。そして税金はその徴収に強制力を伴っている。しかしミッションからの福祉の営みには、「強制的」ではなく「自発的」ということが大切だ。地方政府と住民の協働による地域福祉と、キリスト教側からの地域へのミッションはここで重なる部分があるのではないか。そこで「地域にミッションとしてケアの専門職を派遣する」、というコンセプトづくりができないだろうか。

11 神野直彦「三つの福祉政府と公的責任」神野直彦・金子勝編『「福祉政府」への提言――社会保障の新体系を構想する』(岩波書店、1999年)276頁。

12 神野直彦『財政学・改訂版』（有斐閣、2002年）286頁。

このコンセプトは「働き人の報酬」の部分にも影響するであろう。つまり「介護報酬＋α」という発想である。現在では介護報酬は地方政府が主体となる介護保険からくるが、ここでαの方はケアのミッションとしての働きからくると考えるのである。これは介護事業所というよりも「介護職に従事する人間」のアイデンティティの問題として確立すべきものであろう。
ケア学を身につけミッショナリー・アイデンティティをもった介護専門職には、「介護報酬＋α」というかたちで、教会がαをサポートすることはできるであろう。教会がケア・ワーカーを主イエス・キリストの「ケア命令」に従事するミッショナリーとして捉え、そのような合意が教会内で形成されれば、特定の「社会保障基金機構」を設けて献金を募り、分配していくシステムができる。この「介護保障基金機構」は「ケア・ミッションの『場』における自発的協力のための組織」である。このようにして形成された教会内の「介護保障基金機構」は、ケア・ワーカーにαを提供することができ、彼ないしは彼女の安定したケア・ワークを援護することができよう。

プロフィール

## 阿部志郎（あべ・しろう）

横須賀基督教社会館会長、神奈川県立保健福祉大学名誉学長。1926 年生まれ。東京商科大学（現一橋大学）卒業後、ユニオン神学大学院に留学。明治学院大学助教授を経て、1957 年、社会福祉法人横須賀基督教社会館館長に就任、2007 年まで同館を中心に地域福祉に従事。2003 年より神奈川県立保健福祉大学初代学長を務める（2007 年まで）。その間、日本社会福祉学会会長、日本基督教社会福祉学会会長などを歴任。著書に『地域福祉の思想と実践』『「キリスト教と社会福祉」の戦後』（共に海声社）、『福祉の哲学』（誠信書房）『社会福祉の国際比較』（編著、有斐閣）『新しい社会福祉と理念——社会福祉の基礎構造改革とは何か』（共著、中央法規出版）『地域福祉のこころ』（コイノニア社）『もうひとつの故郷——美しいコミュニティへ』（燦葉出版社）ほかがある。

## 稲垣久和（いながき・ひさかず）

共立基督教研究所所長。（稲垣の詳しいプロフィールは共立基督教研究所のホームページ http://www2.tci.ac.jp/research/inagaki.html を参照）


**Kyoritsu Brochure 005**（ブロシュア）
**共立パンフレット**

2008 年 7 月 22 日

発行人　稲垣久和
編集　高橋伸幸
デザイン　澤地真由美
編集協力　岡田早穂
印刷・製本　Print Bank

東京基督教大学 共立基督教研究所
〒 270-1347
千葉県印西市内野 3-301-5-3
telephone 0476 46 1137
facsimile 0476 46 1292
E-mail kci@tci.ac.jp
http//:www.tci.ac.jp/research/kci.html

本体価格＝ 300 円・送料別

# Kyoritsu Brochure

number 005

Tokyo Christian University | Kyoritsu Christian Institute